十姉妹

山本勝治

青空文庫

田面には地図の様な線条が縦横に走って、旱の空は雨乞の松火に却って灼かれたかの様に、あくまでも輝やき渡った。情けないほどのせせらぎにさえ仕掛けた水車を踏む百姓の足取りは、疲れた車夫の様に力が無く、裸の脊を流れる汗は夥しく増えた埃りに塗れて灰汁の様だった。

そして、小作争議事務所に当てたS寺の一室は日増しに緊張して行った。

「おい、遂々、彼奴等、白東会を雇いやがったぜ」引裂く様に障子を開けて入ってきた藤本は、一座を睨み廻して報告すると、新たに現われた敵を眼前に挑む様に唇を噛んだ。居合わせた者は一様に肩を揺すり眼を据えた。

「知ってるやろ、この県の白東会の支部長云うたら、ほら、この間町でコーヒ呑んだやろ、あの時隅に坐って俺達をにらんでいた紋付の羽織着てた奴、彼奴だよ、永い間東京をうろついていた、そら、町の前川新聞取次店の息子や……」

「ああ、胸毛の生えた、柔道二段とか云う、心臓の強そうな……」

と誰かが訊くと、藤本はグッと首肯いて胸を張った。

「そうや、あれで江戸仕込みの壮士やそうな、どうせ、腕力と心臓の強いだけが取柄の男さ、けど、注意せんと彼奴等の唯一の戦術である『切り込み』があるか知れんぜ、地主からだいぶ金も出てる様子やから……」

藤本の歪めた唇には、激げしい敵愾心が、冷めたい微笑となって漂っていた。同じ想像と期待に、一座の顔は潮の引く様にすっと蒼ざめて、誰れもが深い溜息をついた。

慎作は、勿論この報告に衝撃を受けた。が、その衝撃が、忽ち火に落ちた錫箔の様に崩折れて、燃えあがるべき反抗心が、雑草を揺がす一戦ぎの風ほどの力しかないのを如何することも出来なかった。一寸ひるがえった心が、直ぐと暗い懐疑と姑息な内省に重くよどんでしまった。慎作は、新らしく刺戟されて炎の様に闘志を沸き立たせて居る同志の前に、深く自分を恥じた。同時に、この心の秘密を持ちつつ、同志と共に嘆き共に憤っているかのように装っている自分に、たまらない憎悪を感ぜずにはいられなかった。やっぱり俺は駄目だ。この刺戟に於てさえ、自分の心は豚の様に無感動だ、俺はいよいよ戦列の落伍者だ。何時、何処で、どうして、あれほどまでに燃えあがっていた意識が、常夜燈の様に消えることのないと信じ切っていた反抗の火が、かくまで力弱くされたか自分ながら不可解だった。いや、諸々の原因は数えあげることは出来たが、その諸々の原因そのものが本来なれば胸の火をより燃え熾からしむべき薪である筈だった。この新らしい薪であるべき事柄が、何時の間にか石綿の様に燃えなくなった以上に、却って自分を卑怯にする鞭の役目を努めるとは、前線に立つ者にとって致命傷だと思った。だが、この理智に頓着なく慎作の心は懐疑に燻って羊の様に繊弱なものになる一方であった。理智と思想に於てはまだ、決して曇っていないと確信しているだけに、この脆弱な感情の泥沼から匍いあがろうとする焦燥は一倍強かったが、次々と周囲に起る事柄が反抗を薄めて、不可抗力に裾をかまれた様に動きがとれないのだった。

そうだ。第一に暗い一家の現在が、慎作をひしぐ力の最大なものに違いはなかった。

前年からの借金が抜けない上に、養蚕の不成功に次ぐこの大旱だった。家産を傾むけた正直一途というものよりほかに、何の才能も持合わせない父は、目前の仕事を唯がむしゃらにするより思案が無かった。日向を追っかけ廻る様になっても、まだ維新当時、区長という大役の下命された名誉を、晩酌の酔と共に吹聴することを忘れない祖父は、去年の春、祖父そっくりの頑固者だった兄が死ぬと共に、飾るべき何物もなく、只、ストーヴのように温かい資本家を憎む思想と感情とを土産に、顔を蒼くし髪を長くして帰郷するやいなや、農民運動に寧日ない慎作を目の敵にして、事々に小姑の様な執拗さで盾付いた。母は洗濯とボロ綴りに総ての時間を消費し、妹の絹は、あどけなさと快活な足音とを何処かで失くした様な佗しい小娘だった。

催促のはげしい負債返還の日が近づいても、一年の衣類代と肥料代に当てるべき養蚕の上り高さえ予想外に少くない現在如何にし様もない事は、碌々稼ぎを手伝えない慎作には身に沁みて分かっていた。仙人の様にしなびた脛を、一種超然たるあぐらに組んだ祖父は、落着き過ぎた下半身とは反対に、顔を無闇にガクンガクンさせて、切抜け様もない窮迫を、慎作と父のせいの様にして怒鳴り立てた。

「ほんまに如何する気や、お前等呑気そうに黙ってくさるが、今度こそわしにも見当はつかんぞ、おい慎作、お前の……その何や、新らしいとか云う頭で考えついたこと云うてみい。ヘン、こんな世帯智恵は出まへんがな、直造かて、足しにもならん水換えばかり能やないぜ、何んとか法見付けたらどうやね」

七十八にしてはまだ弾力のある声だった。父は眼を眇める様にしてチラと慎作を一瞥しただけで黙っていた。皆の無視的な態度が祖父の尖がった肩を余計に厳めしくした。

「組合やたら、何やたら、碌でもないことばっかり仕腐って、ええ若い者が何の様や、一ペンでもええから、絹に一枚の木綿物位、買うてやってみい、罰は当たらんぞォ」

だが、慎作は祖父の毒舌には別に反感も覚えなかった。無理にいからした肩も尖先の様にとがり、憎まれ口も歯のない唇にもつれるのを見ると、寧ろ哀憐が先に立った。祖父と違って父は、組合運動のため蕩児の様に家を明ける慎作を責めなかった。時々開催する演説会等にも、祖父だと「文章規範も碌に読めンそこいらの青二才の話し見たいな、ヘッ、あほらしゅて聞けまへんわい！」と鼻先で嗤って、てんで問題にもしなかったが、父は、暇の許す限り出席した。慎作が昂奮して卓を叩き、拍手の前に一寸見得を切る時等、見ると、大抵父も遠慮勝ではあったがパンパンと手を叩いて、少なからず得意気であった。それは慎作の演説に共鳴すると云うよりは、何んでもよい自分の息子が人前で拍手されることを祝福する、愚かな親心の飾らない現われであるらしかった。慎作はそれをくすぐったく思ったが、併しこの父のたとえ子煩悩からの支持にしても、家の中では古い豪傑の様に威張り返って居る祖父の手前甚だ心強くもあった。必然、父は板ばさみになった。そこへ母は、父に譲らない引込思案の女だった。祖父が、「体あたり」式な論法で糞味噌に慎作をやっつけ、ひいては、それを黙視する父自身にまで鋭鋒を向けてくると、流石に父も、昔の思想習慣に引戻されて父親としての責任も考え出す様ではあったが、それでも、丁度赤穂浪士の様に苦難して百姓達の幸福の為めに闘うのだと勇んで走り廻って居る慎作の、固い決心の様を見ては、どうしても口に出しては攻撃しかねる様だった。そ

れに慎作の演説会場に於ける一種の勇姿も、鳥渡捨てかねる風でもあった。兎も角、父と母との思惑は水銀の様に動き易く難かしく言わば「対立」するところの祖父と慎作との間を、振子の様に行ったり来たりした。

ある日だった。

慎作は帰宅するとすぐ祖父に掴まって、宣告的に言い渡された。

「おい、お前は反対やそうなが、こうなったら背に腹は換えられんさかい、どうせ、肥代にも足らん金や、繭の金で小鳥飼おうと思うのや、今、流行ってる十姉妹な、あれに定めたんや」

慎作は、吐胸をつかれて言葉が無かった。愈々来た……ある決定的な問題が、突然、目前一杯に立はだかった様な気がした。

民衆への救いででもあるのか、或は悪魔の手弄みか、実際この十姉妹の流行は、一時天下を風靡した万年青と同じく、不可解な魅力を以って、四国を発端にして中国近畿、殊に慎作の故郷附近には感冒よりも凄じい伝染力をふるった。この小鳥は、安易な世話と僅少な食餌代とで六十日目毎に幾つかの雛鳥を巧みに巣立させた。巣立った雛は飛ぶ様に売れて、親鳥の代価は完全に償われ、後は全くお伽話の様に金の卵を産むに等しかった。憑かれた様な流行力は、何の変哲もなく、只日本人の如く多産であると云うだけのこの鳥に、「白」だとか「背残り」だとか「チョボ一」だとかまるで骨董の様な種別を創造し、価値の上には相場の様な変動を生みつけた。需供の関係等は悪宣伝と浮気な流行心理の後ろに霞み去り、「飼鳥」と云う純粋な愛鳥心等も病的な流行の前に死滅し、そこには唯、露骨な殖金の一念ばかりがはびこった。にわかの小鳥屋が相継いで出来、遊人は忽ち役者の様に小鳥ブローカーとなり澄し、連日の小鳥の市で席貸するお寺には、厄病時の様に金が落ちた。事実、この流行力が存続する限り損失者は殆んど例外で、十姉妹はインチキ骰子同様だった。

「阿呆奴、今に暴落が来るぞ」と嘲笑していた人達が、何時の間にか悪夢の捕虜になってぞくぞく渦に巻きこまれた。早りで、田に旧い餅の様な亀裂が出来初める頃には、地道な百姓達までが鳥籠を造り出した。それは全く異様であった。行逢った人達は、天気の挨拶より早りの噂より先に十姉妹の話だった。それは唯、不景気の病的な反動だとだけでとり澄ましていられなかった。個人を利己的に歪めて一攫千金を夢見させる事に於て、賭博に譲らない蠱惑を持っていた。……

慎作は今、祖父から唐突に飼鳥を言い渡されて、足許に火のついた驚きを味わわずにはいられなかった。

「お前が、なんぜ反対するのか知らンけど、見て見い、拡がる一方やないか、これから東京や北海道の方へも、どしどし出るそうや、ほんまに、これこそ間違いのない内職やぜ。こんなええ事、又とほかにあらへん！」

是が非でもこの思い付は実行するぞと言う意気込みは、畳みかけるような口吻に明かだった。

「金が儲かる儲からんは別問題なんだよ。僕の反対するのは、どれだけ苦しゅても、こんなばくちみたいな流行鳥を飼うなんて、如何にも心を見すかされるこっちゃし、それに、この前の万年青みたい

に何時がらが来るか分からんし……」慎作は、若し正面を切って反駁して行ったら、八才の様にカッとして枯枝の様な腕をも張りあげかねない祖父なので、出来るだけ調子を柔げ静かに言い続け様としたのだが、もう祖父は、怒った時の癖である首をガクンガクンさせて、管を巻くようにいきり立った。

「儲かる儲からんは別問題やで！　何をぬかっしやがる阿呆め、金を儲けたいさかい、苦しいならこその話しやないか、これこそ窮余の一策ちゅうのや！　それに、まだまだ暴落なんか来るもんかい。誰かてまだ二三年は受合や言うてるし、おれ、今日仏さんの前でけんとく（予想）みたんや、『吉兆』と心の底で声がしたわい」

「そら分かってる。苦しいから鳥でもと思うのはよく分かってるが、そうやないのだ祖父さん、おれの言うのは、一羽二羽楽しみに飼うのと違うて、大切な資本をかけて小鳥屋みたいに鳥飼うて、そら今日も鳥の市や、明日は西応寺で交換会や、ほら『脊残り』は一つぺンに二十円も値が上った、ほら何、ほら何やと、百姓がまるで相場師みたいになるのが間違うてると言うのだ、この旱りと繭の不作で苦しいのは、今切り抜け様と、皆が結束して争議を起してる最中やないか……」

「ヘン、偉そうなほげた吐かさんとけ！　小作争議みたいな、第一お前等が先頭やないか、負けるに決まってる。小鳥で儲かるのは、ちゃんと見えたことや、ここ二年三年のうちに、何千何万と儲けた人が幾人あるか分からん位やないか。小鳥で儲けたら、小作料を負けろって、徒党なんか組んで騒がんでもええのや……」

「それがいけないのだ、争議に加わっている者のうちでも、だいぶ十姉妹に色目つかう者もあるけど、その度におれは言うのだ。十姉妹の流行なんか決して永久に続くものでもない。と言うと、たとえ流行ってる間だけでも飼うて助かりたいと言うかも知れんが、そう云う心は、自分一人だけよかったら他の者は構わないって言う心と同じだ。百姓は百姓として働き、それで如何しても食えなんだら、それは、天候と地主と社会全体の責任だから、その時は百姓は一致団結して……」

「ええい、黙まらんかッ、この社会主義奴！　十姉妹は大丈夫やわい、この勢いやったら世界中ひろまる！」

「とにかく、おれはこの理由のもとに、蚕の金なんかで十姉妹飼う事は大反対や」と慎作は断定的に、併し半分はおどけた顔色を忘れずに言った。反射的に、多分祖父は喉で叫んだのだろう、声は出ずに、唇が「何！　何‼　何※」と言う風に動いた。すぼんだゴム風船の様にベロベロ皮膚のたるんだ顎が、驚くほど延びた。慎作は、この一徹な祖父を納得させるだけの言葉を知らない自分が腹立たしかった。いや、自分の思想を如何に噛み易く柔かなものになし得ても祖父の歯牙は、既に区長授与の刹那に於て抜け落ちてしまったのを如何せん……であった。

　その夜、父は、祖父と慎作との間で眼の遣り場に困っていた。

「お父っつぁんの様に言うたかて考えもんやぜ、慎作が反対しよるだけやなく、なんぼ流行かて、きっと儲かるもんとはきまってやせんしなあ、……それに、もう遅いわい！」

　だが、その事より何より、父は慎作の意嚮に気をかねて居ることは確かだった。父にしてみても、不成功だった養蚕をこの鳥で、或はとりかえせるかも知れない事は、何に増しての誘惑であるに違い

なかった。

「いや、儲かる、世間をみたら分かるこっちゃ、一体誰れが損をしよったんや？　皆、儲けてるやないか、この村でかて、十姉妹飼えんのは慎作みたいな因果な息子を持った家だけや、慎作に何の遠慮があるのや！　飼え言うたら飼え！」祖父は唾を飛ばしてあくまで決定的であった。

「そやなあ、どっちにしてみてもええ考えやが、十姉妹ででも儲かったら、少しは助かるのやけども……」余程、心動いたらしい母が横から口を出すと、父は何時になく顔を赤くしてたしなめた。

「糸！　お前は黙っとれ！」

併し父は、直ちに祖父の逆襲を受けねばならなかった。

「何やて直造！　糸になんの怒るとこあるのや、そやったら何やな、お前にはこの苦しい家を明るみに出す好い考えがあるのやな、さあ、それを聞かして貰おうかい、この際、鳥より上手な金儲を知ってたら、教えてほしいもんや！」

父は瞬間、顔を逆撫ぜにされた様な表情をみせたが、すぐと持前の、如何にもお人好らしい微笑をたたえて「これや敵なわん」という様な眼色で慎作を見た。

祖父の罵りと迫る貧困と、さし招ねく誘惑の中で、どう梶をきめて好いか迷い乍ら、辛ろうじて自分を尊重してくれる父に、慎作は心から感謝した。

けれど、それから一週間ほど経って、委員会が永引いたため夜十時頃帰宅した慎作は、敷居を跨たぐと同時にはッとして棒立になった。蚊遣りの煙りが薄い幕の様に立ちこめたほの暗い土間で、白襦袢一枚の父と祖父とが並んで坐り、父は板をカンナで削っていた。坐禅めいたあぐら姿の祖父が、両手を膝に端然とつき、亀の様に首を延ばして父の手付を頼もし気に覗き込んでいた。薄い燭光と蚊遣りの煙りに包まれた二人の周囲に、心なしか、何か秘密の作業場と云った雰囲気が感ぜられた。門口に突立った慎作をみて、台所で縫物をしていた母も、土間の二人も、一瞬、息を呑んで体を固ばらせた。と、父は慌てて側に置いた鳥籠を糠桶の蔭へ押しやった。そして、不自然なほどかがみ込んでカンナに力を入れた。「シュッ、シュッ」と、カンナの音が何かの悪い前兆の様に四辺に際立って、むくれあがる白いカンナ屑が傷ついた者の様に転がった。白い眉をあげて祖父は屹と慎作を見たが、思い返したように舌打して向き直り、故意と慎作を無視する様な高い皺枯れ声を出した。

「これで八つ位は、大丈夫出来るやろな？」

「……う……」父は曖昧に首肯いていよいよかがみ込んだ。胸一杯にふくれあがってくる強い感激めいたものを拒むように、慎作は晴れがましく「只今！」と言って上がった。母は、慎作の飜った態度にほっとして、すがりつく様に言った。

「慎作、粥、温めるかい」

慎作は首を振って、冷めたい芋粥を水の様に流し込んだ。たかが些細な十姉妹の問題だ、自己の主義主張と家人の行動とは、必ずしも併立するものじゃない、清濁あわせ呑む度量と、矛盾の中での一つの……けれど鼻が痛く眼頭が熱く見まいとしていて視線を土間に引寄せられた。無論、父は祖父の強制に、詮方なく露の様に向う側へ転んで行ったに違いなかった。責めたてられる奴隷の様に手を休めなかった。祖父は愈々肩を張り、ゴムの様に唇をもぐつかせてい

た。慎作が食事を終っても二人は土間を離れなかった。
「もう、好加減にして寝なはれ、明日また、水換えで急がしいさかい！」と、母が白けた空気をとりなす様に言ったのをきっかけに、二人は道具をかたづけたが、寝ようとはせずに慎作の居る火鉢の前に坐って無闇と煙草を吹かした。父は、すまなさそうに慎作の眼を逃げては故意とらしい咳払いに何度も拘泥し、祖父は喧嘩前の腕白みたいに唇を尖がらし、バタバタと団扇を煽った。慎作は、この場合何とか言わねばと思っていて、思考がとりとめないままに深く沈んで言葉が無かった。
「慎作、やっぱり十姉妹飼う事に定めたぜ」
祖父は止めの様に言い切って心持身構えたが、何時までも慎作が黙っているので気抜けした様に声を落し「なんぼお前が嫌いかてこうなったら、藁にでも掴まるより仕様あらへん、さあ、直造、寝よ、寝よ……」と、危っかしいすり足で次の間に入った。
思い切って慎作は、併し哀願的に言わずにはいられなかった。
「お父っつぁん、どうしても十姉妹飼うのかい」
「……」
「鳥渡、考えただけでは別に悪い事とは思えんけれど、この間から何度も言う様に、俺の立場から言うと……」慎作が父の顔を見ない様にして言い続けようとすると、父は狼狽てて「いや、その事やったら、よう分かってるのやが」とせき込んで遮切ったが、何かの固まりの様に唾を呑むと弱々しく呟やいた。
「何せ。爺さんはガミガミ言うし、蚕があんな様やった上に、この早りやろ……おまけに、この秋に返えさんならん借金の当は皆目つかんしなあ、わしかて、お前の理窟は成程と思うてんのやが……」
「俺も、お父っつぁんの心配は分り過ぎる位分かってるよ、充分家の手伝出来ん俺がかれこれ言う権利はないか知らんが……」
「いいや、そんな事あらへんけど……」
慎作への理解を眼色にふくめて、彼の述懐をいたわってくれた父の言葉を、次の間から祖父の疳癪声が更に強く打消した。
「そやそや、慎作なんかに、ちょっとも権利なんかあらへんぞ」
後に、白けた沈黙が深かった。
慎作は、坑道を見失った土龍の様な父が、最後に頼ろうとする飼鳥を、理性一点ばりで拒否する自分が非常に冷酷なものに思えてならなかった。赫黒い父の額に、藪蚊が一匹血に膨れて止まっていたが、鳥渡、眉をしかめただけで叩こうともしなかった。掌のマメをぼりぼり掻きつつ、頭の中で難解な謎でも解きほぐそうとするかの様に、永い間、上眼遣いに顔を動かさなかったが、ふと決心した様に父は、慎作を真直に見た。
「お前が、顔出し出来んことやし、そうや、やっぱり十姉妹は止めにしよう」
「ええ、止める？」
「ああ、爺さんは怒るやろが、止めるよ、何とか考えよう」
父はにじむ様に微笑した。同時に次の間で「何やて、止めるて⁉」と祖父の叫びがしたかと思うと、ゴソゴソ赤児の様に匍い出して来た……。
父の醵意に、慎作は自分のために飼鳥を思い止まってくれたのだと言う喜こびだけでは足りない、もっと大きい感激を覚えた。寧ろ自分への愛だ等と推断するのは、父への冒涜だと思った。父に一つ

の根強い自覚を見た……そう慎作は考えた。

が、その翌晩、何処へ行ったのか父は十二時過ぎまで帰らなかった。それは今までに無い異例だったので慎作は非常にいぶかったが夜更けに帰宅した父の、大きい過ちでも犯したような自卑的な眼差しと物腰しを、狸寝の眇(すが)めに見せつけられて、尚の事、不審を大きくした。不躾な祖父の追窮にも、父は誤魔化す様に笑うのみではっきり言おうとはしなかった。それが隔日か、二日置きに半月程も続いた。

その間に只一度、珍らしく濁酒(どぶろく)を呑んで酔った時、父は哄笑しながら「まあ、爺さんも、慎作も、心配せんと見ておくれ、今に皆んなをアッと言わせるからな、それまで種明しはおあずけや、あはは、近いうちに、皆んなでエビス顔やぜ」と言った事があったが、その調子が如何にも附元気らしく、あははは笑っても、その笑顔が今にも惨めな泣顔に変りそうなのを、慎作はいやにはっきり感じた。併し父は、それ以上の詰問には碁盤の様に固ばるのみで答えなかった。

父の秘密な外出——この間に遊びという感じは毛頭なかった。それだけにまた異様な恐怖を、大袈裟に言わば密封された恐ろしい贈物を前に置く様な恐怖を、抱かずにはいられなかった。

ある晩、とうとう母は、祖父には内密に自分の想像を、そっと慎作に打明けた。

「ひょっとすると……あの人、田村へ行ってるのかも知れへんぜ」

「田村へ！……まさか……」と打消したものの、慎作は変に吐胸をつかれた。予想外の事ではあったが、言われてみると、この際、案外近々しい想像なのに驚かされた。田村の賭場へ父が……と想っただけで、「勝負！」と骰子壷の伏せられた瞬間、試みにピアノの鍵盤を叩いてみたら、その音波が散り拡がろうとはせずに何時までも響いていそうな、極度にはり切った空気、押し潰した嘯やきと、袖口と胸元から隠見する入墨、その片隅で、例のお人好らしいにじみ笑を浮かべて、しかし両手は中風の様に震わせているであろう土に汚れた父……が見える様だった。ふと画がき出した幻影の様なこの想像に、見る間に、額にはまった絵の様な確実味が帯びた。だが慎作は何気なく言った。

「母さんに、思い当たる節でもあるの」

「そやかて……こないに毎晩、何処へ行くとも言わんと出て行くのが、第一変やないか、それにあの人の、近頃、落着きのないこと、そら可笑しい位やぜ、引出しの鍵はあの人が持ってるよってに、蚕の金はどうなったか知らんけど、な、慎作、きっとそうやで」

ひそめるだけ声をひそめた母は、若し慎作が、「そうだ、それに定まった」とでも言おうものなら、わッと飛び立ち兼ねない様子を示していた。十姉妹を一つの自覚から思い止まってくれたのだとすると、その父がこっそり賭場通いする等とは、どうしても算出されない筈の答案ではあったが、また一方、たとえ飼鳥は思い切っても他に何とか格恰をつけねばならない責任のある父にしては、あの晩、既に「賭場」が思い当っていたのかも知れないとも考えられた。自覚からじゃなかった、少くともそれは第一義じゃなかった。子煩悩から支持する愛児の面目を、理由は第二として盲愛から立てずにはいられなかったのだ。そうは思っても、慎作は父に対して決して幻滅を覚えたりはしなかった。総てを胸のうちにおさめて臆病な父が、

賭場通い等と言う様な冒険を決意した……その間の苦渋が胸の痛むほどに察しられた。

　田村の賭場は、巧妙な客引策に依って百姓達を鴨にする、近代には珍らしい（或は当局に何等かの了解を得てるのかとも邪推されるほどに）堂々たる賭場であった。村の銀三や源太等の常連のほか、慎作の村にも少なからず田村のお客がある様子だった。この附近には、十姉妹や万年青等の流行を先鞭的にきたすだけに、賭博等の悪習も封建時代から濃い筋を引いていた。田村の賭場は、玄関先でそっと面を見せれば、中ではお客に覆面さえ許した。面を包んだ客がさし向いに黙って賭に熱中し、無意識に覆面をとり、後ではッとして見交すと、それがお互に知人でお互によもやと思っていた人間であった……こんなエピソードまであった。養蚕期の直後等は定例の様に、源太や銀三が百円札の五六枚も見せびらかせつつ一種の勧請に歩いた。

「お前、ちょっと田村の近所までも、見に行ってくれへんかい」と、母にも悲しい確信があるらしかった。

「大丈夫そんな所へは行ってへんと思うが、よし今晩、どれだけ遅くなってもよくお父っつぁんに訊いて見るよ」

「そやかて、今晩も、もう九時過ぎやのにまだ帰ってきやへんし！」

　と、その時だった。表戸が突然細目に開いて、そこに覗う様な二つの眼が光って、声は表でした。

「エ、へへへへ今晩は！」と、漸く戸を開けて入って来たのは、遊人風体の男だった。

「へへへどうも、こんなに遅くお邪魔して何とも申訳ありません。直造旦那のお宅はこちらで？」小腰をかがめ乍らその男は封書をさし出した。そこに、薄い墨で認めた下手な父の筆蹟があった。

　くわしきは帰りて申上候。この使の者に金三十円也お渡し下され度し、家には三十円無之と思うが、三十円のネブチある品物にてもお渡し下され度し。

　爺殿にも慎作にも何卒ないしょにお願申候、それからタンスの百五十円は無之候御すいりょ下されて何卒何卒宜敷願上候、お詫びは帰りて幾重にもいたす可候

直造

糸殿

　手紙を書いたこと等の殆んど無い父の、この拙い文章が、どんな悲痛な台詞にも増して胸にせまった。荒々しい風が直接身内へ流れこんで、ふっと音を立てて何もかも吹き消された様な気がした。この気配に折悪しく祖父が起き出てきた。

「何や、何や？」と祖父は、手紙をひったくるなり念仏の様に音読して「外道奴」と唾をとばし、再び音読して「情けないこっちゃ、この下手糞な字を見たれ！」と、泣声で呟やいた。

「へへへどうも……」他国者らしい男は懐から風呂敷を出して下品に笑い、袖口からのぞく入墨に似気ない猫撫声を出した。

「何しろ、このいたずらって奴は『目』でしてね、へへへその運ですね、此方の旦那なんざあ、仲々どうして素人衆にしちゃ上手なもんですが、何分、今言った様な次第で、今夜はその目ってのが無く、それに、あせって追っかけなすったもんですから無理な借りまで背負いこんだ様な訳でして、この落目の時の追っかけってのはまた不

思議と！」

「ええ、ゴタゴタ言わんといてくれッ」と祖父は男をグイと睨みつけて、母に怒鳴った。

「糸ッ、何を泣いてるのや、早出してやらんかい。わいの紋付も絹の外出着も、皆包んでやれ、ほほたら、少しは性根にこたえるやろ」

男が出て行くと、祖父は通りの悪い煙管を岬の様に唇を尖がらせて吹きまくり、泣く母をたしなめた。

「お糸、泣くなよ、泣いたかて如何なるこっちゃ、見っともない、泣きな、泣きな！」

母は、塗りの褪せた箪笥に凭れかかり、空になった鱚金の財布を、ハンケチの様に目に当てて嗚咽った。

妹は影の様に裏口から出て行ったと思うと、すぐコソコソと戻ってきてカマドの蔭に蹲った。

「あんな人が丁半するなんて、蚕の金までとられてしもうて、ほんまに、肥代や今度の利息どうする気や、夜も寝やんと桑洗うた絹や、手伝うてくれた新宅の里代にも、まだ一枚の着物もこしらえてやらへんのに……。ほんまに、あの人、気でも違うたんや！」

「気も狂うやろかい、この旱りと繭の不作やないか、彼奴かて、そら苦労しとるんや、苦しまぎれに田村へなんか行く気になりよったんやわい。こんなんやったら十姉妹でも飼うといたら！」と祖父は、たるんだ瞼を釣りあげる様にして慎作を睨みつけた。

「鳥でも飼うといたらこんな事起らなかったンや、わいがなんぼよぼよぼでも、十姉妹の世話位出来たんや！　みてみい、あれから鳥の相場、まるで鰻のぼりやないか、それにこれから南洋へまで送り出すって、新聞に書いたある。それやのに、この餓鬼が、屁理窟並べやがったさかいに……こら慎作、未練やないぞオ、お父っつぁんが、一人で苦労してばくちみたいなものに手を出しよったのも、みんな、お前のせいやぞ」

祖父は喋り乍ら、日頃からの不平不満に一時に火が付いた様に熱して行った。袴、丈、の短かい浴衣が、憤怒を嗤うように枯れた全身にまつわりついていた。

「さ、違うなら違うと言うてみい、こら、なんぜ黙ってくさる、返事せんかい、この罰あたりめ、この先、この一家はどうして暮らすのか言え。これでも貴様はまだ、十五円の月給仕事仕腐さる気か⁉　改心するなら両手をついてあやまれ。こ、こら、慎作、なんで寝転びやがる！　この阿呆、年寄やと思うて馬鹿にする気か、こん畜生‼」

堪え兼ねた様に祖父は立上ろうとしたが、利かない体は無闇な威勢を裏切って、つつかれた達磨の様に尻餅をついてしまった。

その夜、父は帰らなかった。

明け方、心配の余り、町の田村まで迎いに行こうとした慎作は、裏の田で、軍鶏の様に眼を薄黒く窪ませた父が祈る様に瞼を閉じて、ギイギイ水車を踏んで居るのを見た。

ふいと慎作を見付けた父は、危く足を踏みはずそうとしたが、やっと両肱で体を支え、それでも微笑もうとした。が、笑えなかった。どんな時にでも、看板の様に面から去ったことのない微笑が、今はもう拭きとった様に消え去ったのだ。慎作は、ただ泣き笑うより術はなかった。出来る事なら、愛撫を籠めた手で父の背を叩き、何ん

でもよい涙の出る様な慰めを何時までも言い続けたかったが！

　振りかかってくる火の粉の様な苦痛は、街と野にあふれた悲惨は、すべて皆、反抗の火を※く燃料たるべきであった。だが、一家の悲惨はあまりに身近過ぎる様だった。それは余りに生々し過ぎる薪であった。理智が悩みを清算する前に感情は迷児の様に泣きわめいた。慎作は、この事実に全く打ひしがれた自己をはっきり知った。そうだ、慎作は、常夜燈の様に消えなかった胸の火を、忽然吹き消されたまま、村を背に、同志を背に、殊に真暗な一家を背にして、何処までも何処までも走って行きたかった。だが、足には思想のおもりが離れず、頭では間断なく理智の鐘が鳴った。何のこれしき、闘争児の総てが舐める苦痛ではないか、高く批判せよ、あらゆる煩悶を情熱の糧にせよ！　けれど、この呟やきも野面を渡る一陣の風であった。一戦ぎの後に、古沼の様な憂欝が襲いかかった。これが、毎日の闘争にまで尾を引いた。今まで気にも止めなかった同志の、ふと不用意に洩す利己的な言葉の端が、棘の様に心にささり、ともすれば白眼をむきたがる仲間の百姓に、日頃にない軽蔑を覚えたりした。

　慎作は恐れ乍らも想った。もう一つの苦痛が、より大きい試練がほしい、それに依って現在の如何にもならないこの怯懦が、このまま絶望の底へ沈潜してしまうか、或はまた、それを契機として再び暁雲の様に情熱が染め出されるか……いささかこの希求に不安とあるおこがましさを覚えつつも、抱かずにはいられなかった。

　白東会を雇って応戦準備を整えた地主達は、戦艦の様に落着き、小作人達の結成を眼下に視下した。「農民組合を脱退して来い。すべての交渉はそれからの事だ」これが動かない最後の返答だった。

　示威と結成の固めを兼ねて、大演説会がS寺の電気のない大広間で開催された。説教壇に弁士が立って激烈な言葉を吐いた。百目蝋燭が聴衆のどよめきにゆらぎ、その都度、触け合った陰影が生物の如く躍った。

　藤本が演台に立った。川っ縁や林で鍛えた声が、二十四にしては朗々として太かった。金色の仏具に反映する柔かな光芒、感激に息を呑む聴衆、一堂の場景は何か尊厳な、旧びたフィルムの様だった。藤本の論点は白東会に及んだ。

「……諸君、地主は遂に白東会を抱き込んだ。これが彼奴等の常套的な最後の手段なのだ。白東会とは何か……名を正義に藉りたる暴力団に過ぎないではないか！　彼等地主は、今や悪剣をとって立ったのだ。諸君は、桜田門外の雪が血に染められたのは！　井伊の握った暴剣の報いであることを忘れないだろう。我等、正義を主張する、国宝たるべき百姓に、剣を持って臨まんとする彼等……」

　この時であった。演壇の直前にすっくと立あがった一人があった。おや、と思う間もなく人蔭は演壇に飛びあがった。

「国賊ッ」叫喚が礫の様に聴衆を打った。

　と、白刃がサッと光芒を切って、高く翳された藤本の右腕に、にぶい強靱な音を立てた。慎作は駈け寄った。どっと殺到する群衆の上で、白刃が瞬間鋭くきらめいたが、忽ち拭われる様に消えた。藤本は血のしたたり落ちる右腕を支え乍ら、微笑を忘れていなかった。左右から警官に掴まれたその男は、荒々しい胸毛の胸をはだけて、闘犬の様に吠え立てた。

「俺は、白東会の前川だ、正成じゃないが、七度生れ変って国賊を誅すぞ」

犯人を奪おうとして犇く群衆に、揉みほぐされそうになり乍ら警官は退場した。

藤本の右腕は失われた、だが、彼の逞しい勇気には、失くした右腕だけ附加した様だ。

「なあ、慎ちゃん、こうして俺達の意志は鍛金の様に強くされるんや。白東会の彼等、俺が右腕やられたさかい、もう争議には出るまいて言いふらして居るそうだが、ふン、右腕一本位で、屁こたれる品物と、品物が違うわい。左手と足がまだ二本もあるやないか、かりに、これ皆やられて胴ばかりになっても、若し生きてさえいたら、俺は止めんぞ、そうなったら慎ちゃん、いざり勝五郎やないが乳母車にでも乗って、君に後押して貰うわははは」

「ああいいとも、後押しは引受けた。」

藤本の凄まじい闘志に、却って励まされる形であったが、それでも慎作は、久しぶりで心の底からはっきりものを言った様に思った。とぐろを巻いていた心が、春を迎えた蛇のそれの様に、のろりと頭をもたげた様な気がした。自家の暗欝は、まだどうしても燃えない薪ではあったが、藤本の遭難は暗い心に一つの窓を開けてくれた。

病院を同志の宮崎と連れ立って出た時は、黄昏(たそがれ)であった。宮崎は涙をためて藤本の闘志を讃嘆した。

「宮崎、やろうぜ、どうせ、階級戦線に骸(むくろ)を曝す吾々だ」

慎作も合槌を打ちつつ、寧ろ自分に言い聞かせる気持だった。そうだ。まだ俺の心は死火山ではない筈だ。今に、藤本に負けない活動を初めるであろう。

常設館の角を曲がってA川に沿って坂をのぼりつめるところ、A橋と小さい公園の入口とが、丁字形に接して居た。そこに夕照を受けて涼みの群が円を造くっていた。近寄るにつれて、はげしい拍手と笑声が聞えてきた。

「何んだろう」と、宮崎は小走りに寄って行った。慎作も大跨になり延びあがる様にして中心をすかし見たが、二三間先の宮崎が突然くるっと廻って慎作を睨み、何か訳の分からない叫けびをあげたので、中心に何があるか分からないままに立止まった。宮崎は何故か酷(ひど)く狼狽して、慎作の腕を掴んで橋を渡ろうとした。

「何だ、どうしたんだい」宮崎の腕にグングン引っぱられながら、後に凭れる様にして慎作は原因を探った。と、また、宮崎は急に立止まった。まじまじと慎作を見詰めて、徒に唇を歪めた。

「おい、喫驚(びっくり)させるなよ」と、呆れて慎作が叫けんだのと、聞覚えのある声を耳にしたのと、群衆の隙から眼球を引抜かれる様なものを一瞥したのと、殆んど同時だった。

「おおッ」慎作は泳ぐ様に群衆をかきのけた。クワッと最後の一炎をあげた晩暉の中に、拳で空を叩き、熱弁をふるっていたのは、盲縞の裾をはしょり、全身を痙攣させた、まぎれもない慎作の父だった。

「物持階級は百万円の問題である。吾々は団子の様に固まって……」

父は据えきった眼をギロッギロッと人々の上に流して行ったが、突然、恰も空から落ちかかる何物かを受け止める様に、両手を高々と翳して、一語一語に永い尾を引かせて叫けんだ。

「十姉妹は悪いぞオ、なんぜ、皆は、鳥なんか飼うのかあ、丁と半

とは仲々分からないぞオ、諸君、物持階級は百万円の問題であある。」

誰れかが「ヒヤ」と弥次り、誰かが「ノー」と嘲笑った。怪訝そうに足を止める新らしい通行人も、演説者の狂気を知ると安心して顔を崩した。

「……であるからして、吾々は団子の様に固まって……」父は、皮肉にも慎作の演説の端っくれを、而かも慎作そっくりの抑揚で叫けぶと、だしぬけに掩口された様に行詰まり、義眼の様に瞳孔を拡大させた。汗と涎れが哀愁と憤怒の表情のまま氷りついた顔皮を、びっしより濡らしていた。

「団子の様に固まってどうするのや」

「喰うのかい」

「この狂い、さっきから同じ事ばかり言いよるがな、浪花節でもやってんか」

父は狂った。狂った父が、機械の様な饒説であった。昏倒しそうな衝動が慎作を一種の無感覚に誘ったが、次の刹那せきを切った怒濤の様なものが、爆発した火華の様なものが、全身を狂い廻った。

慎作は泥酔者の様によろめいて近寄った。

「おい、お父っつぁん、しっかりしてくれ、おい、おおいッ」

涙で震える視野に、不審気な青い顔が、ぼッと霞んでいた。

「おい、分からないのかい、俺が——慎作が分からないのかい」

襟首を鷲掴みにされて身悶えした父は、渋面一杯鯉の様にパクパク口を開き、何か叫び出しそうにした。群衆はどよめいて、囁きが飛び交うた。

「あ、父子やぜ」

「ありゃ、S村の直造さんや」

「二人とも狂うてンのかい」

「何や、何や？」

慎作は、父をかかえ込んで叫けんだ。

「諸君、これは私の愛する父です。私は、父の狂ったことを今はじめて知りました。私の父は従順しい、正直者でした。それが、それが……どうして、こんなあさましい気狂いになったか、諸君、諸君にも責任があるのだ。それは十姉妹の悪流行だ、この大早りだ。貧乏だ、悪地主だ、いや、それは、それは、資本主義制度の……」

声は泣きかすれて行った。が、見よ！　慎作の胸底にうず高く積まれた悲惨な薪に、遂に火がついたのだ。今こそ、無産階級意識が、大炬火の如く燦々と輝やき出したのであった。

青空文庫情報

底本：「日本プロレタリア文学全集・11　文芸戦線作家集　（二）」
新日本出版社
　　1985（昭和60）年12月25日初版
　　1989（平成元）年3月25日第4刷
底本の親本：「文芸戦線」
　　1928（昭和3）年5月号
入力：林　幸雄
校正：青野弘美
2002年3月13日公開
2008年3月25日修正
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

十姉妹

山本勝治

2026年10月1日　第二版

奥　付

発行　　青空文庫

URL　　http://www.aozora.gr.jp/
E-Mail　　info@aozora.gr.jp

作成　　青空ヘルパー　　赤鬼@BFSU
URL　　https://aohelp.club/
BiliBili　　https://space.bilibili.com/10060483

Special Thanks
　青空文庫　威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー http://aohelp.club/
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
http://tokimi.sylphid.jp/